

桜島の火山活動解説資料（令和4年3月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

南岳山頂火口では、噴火活動は低下した状態で推移しています。ごく小規模な噴火が時々発生しました。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、2021年11月頃から山体膨張を示す緩やかな地殻変動が観測され、島内のGNSS連続観測でも、山体膨張に伴うとみられるわずかな基線の伸びが観測されていましたが、いずれも2月下旬頃から停滞しています。

広域のGNSS連続観測によると、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部にマグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。また、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量がやや多い状態で経過していることから、現在噴火活動がみられている南岳山頂火口を中心に今後噴火活動が活発化する可能性があります。

南岳山頂火口及び昭和火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。なお、今後の降灰状況次第では、降雨時に土石流が発生する可能性がありますので留意してください。

令和3年4月25日に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1～3、図5、図7-①②）

南岳山頂火口では、ごく小規模な噴火が時々発生し、噴煙が最高で火口縁上600mまで上がりました。計数基準を満たす噴火¹⁾（爆発を含む）は観測されていません（2月：噴火2回、爆発なし）。

同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

昭和火口では噴火は観測されていません。

17日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、南岳山頂火口から、白色の噴煙が上がるのを確認しました。また、昭和火口内では噴気を確認しました。南岳山頂火口及び昭和火口の周辺の状況には、前回（2月24日）と比べ特段の変化は認められませんでした。

1) 桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが火口縁上1,000m以上）の噴火の回数を計数しています。資料の噴火回数はこの回数を示します。また、基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火として噴火回数に含めていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和4年4月分）は令和4年5月12日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

（<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>）

この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局大隅河川国道事務所、京都大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『基盤地図情報』を使用しています。

・地震や微動の発生状況（図4、図7-⑤～⑦）

火山性地震の月回数は36回で、前月（2月：22回）と同程度でした。震源が求まった火山性地震は7回で、主に南岳直下の深さ0～2km付近及び桜島南西側の深さ8～10km付近に分布しました。火山性微動は観測されませんでした（2月：継続時間5分）。

・火山ガスの状況（図7-④）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり800～1,300トンで、前月（2月：700～1,700トン）と同程度でやや多い状態でした。

・地殻変動の状況（図8～10）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、2021年11月以降、山体膨張を示す緩やかな地殻変動がみられていましたが、2月下旬頃から停滞しています。

また、GNSS連続観測では、桜島島内の一部の基線で2021年11月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸びがみられていましたが、2月下旬頃から停滞しています。

一方、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、2021年10月頃から、始良カルデラの地下深部の膨張を示す基線の伸びが認められています。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

・降灰の状況（図6、図7-③）

鹿児島地方気象台（東郡元）では、降灰²⁾は観測されませんでした。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した、桜島の火山灰の2月の総噴出量は、約1万トン（1月：約2万トン）でした。

2) 鹿児島地方気象台（東郡元：南岳の西南西約11km）において、前日09時～当日09時の1日間に降った1㎡あたりの降灰量の月合計です。



図1 桜島 17日11時56分に発生した南岳山頂火口のごく小規模な噴火の状況
（海潟監視カメラ（大隅河川国道事務所設置））

ごく小規模な噴火に伴う噴煙（黒矢印）が火口縁上600mまで上がりました。



図2 桜島 上空から撮影した南岳山頂火口及び昭和火口の状況

南岳山頂火口から、白色の噴煙が上がるのを確認しました。また、昭和火口内では噴気を確認しました。南岳山頂火口及び昭和火口の周辺の状況には、前回（2月24日）と比べ特段の変化は認められませんでした。



図3 桜島 図2の観測位置及び撮影方向

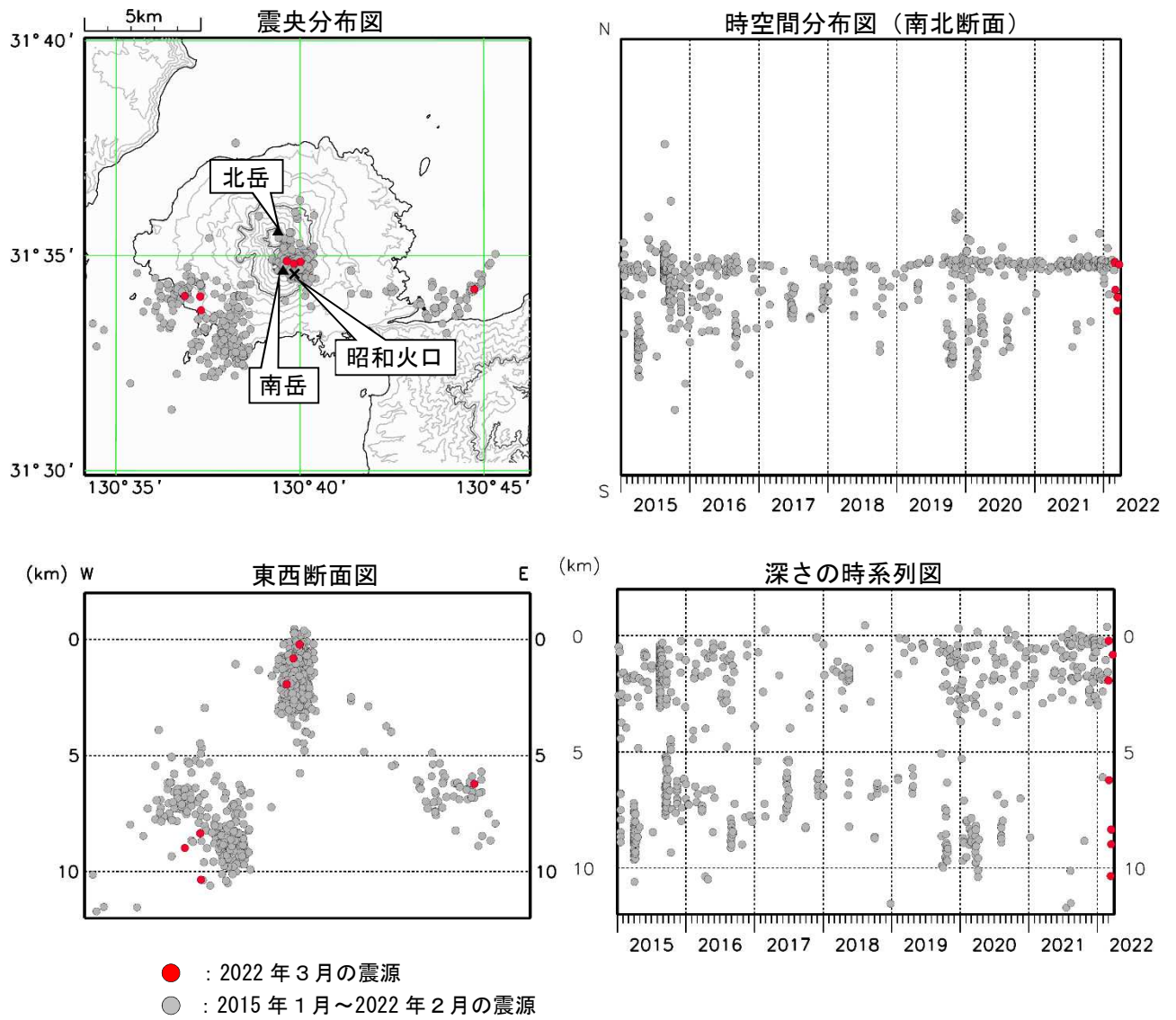


図4 桜島 震源分布図（2015年1月～2022年3月）

< 3月の状況 >

震源が求まった火山性地震は7回で、主に南岳直下の深さ0～2km付近及び桜島南西側の深さ8～10km付近に分布しました。

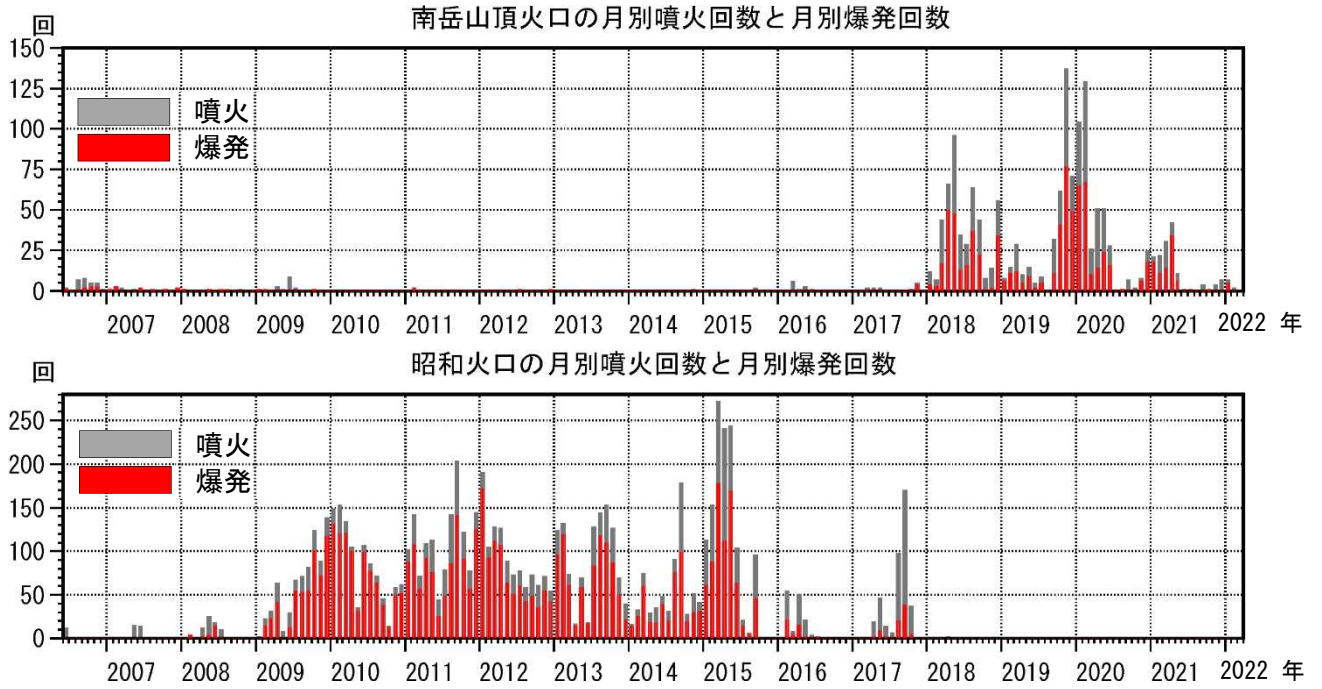


図5 桜島 南岳山頂火口（上図）と昭和火口（下図）の月別噴火回数と月別爆発回数
（2006年6月～2022年3月）

< 3月の状況 >

- ・南岳山頂火口では、計数基準を満たす噴火（爆発を含む）は観測されていません（2月：噴火2回、爆発なし）。
- ・昭和火口では、噴火は観測されていません（2月：なし）。

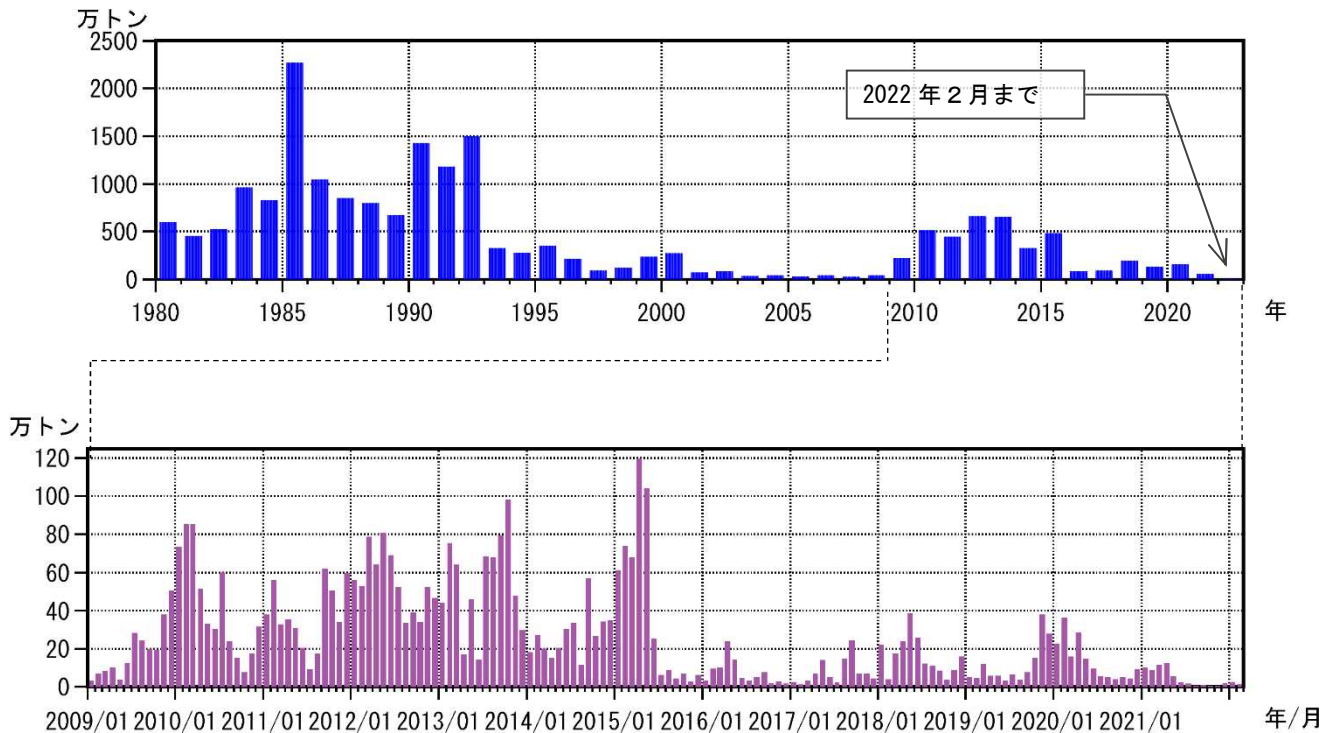


図6 桜島 鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した火山灰の総噴出量
（上段：1980年1月～2022年1月の年別値、下段：2009年1月～2022年2月の月別値）

2022年2月の総噴出量は、約1万トン（1月：約2万トン）でした。

※鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。
※降灰の観測データには、風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

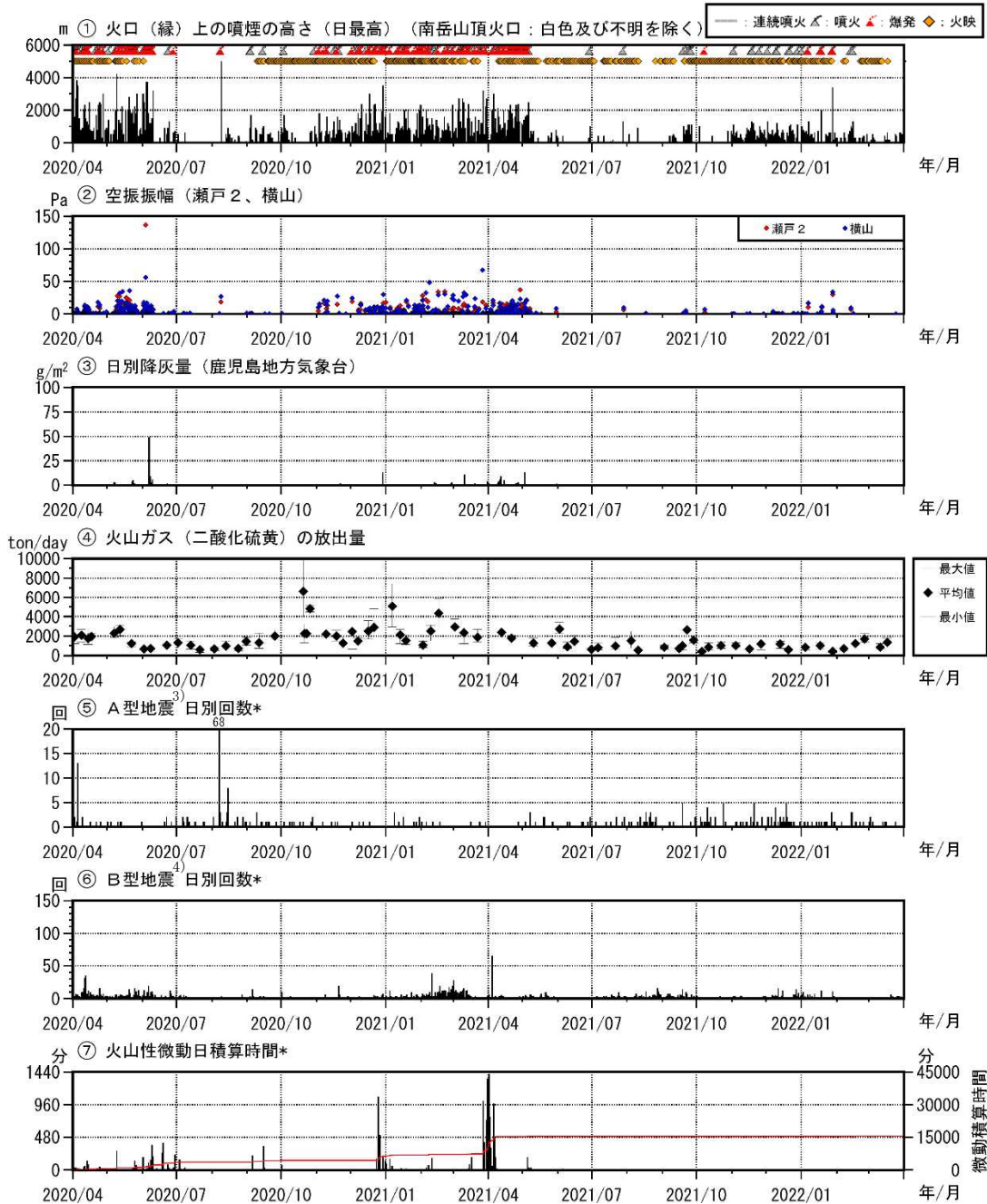


図7 桜島 最近2年間の活動経過図（2020年4月～2022年3月）

＜3月の状況＞

- ・南岳山頂火口では、ごく小規模な噴火が時々発生し、噴煙が最高で火口縁上600mまで上がりました。計数基準を満たす噴火（爆発を含む）は観測されていません（2月：噴火2回、爆発なし）。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。
- ・鹿児島地方気象台（東郡元）では、降灰は観測されませんでした。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり800～1,300トンでやや多い状態でした（2月：700～1,700トン）。
- ・火山性地震の月回数は36回で、前月（2月：22回）と同程度でした。
- ・火山性微動は観測されませんでした（2月：継続時間5分）。

*「あみだ川及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動2.5μm/s以上 横山：水平動1.0μm/s以上）

- 3) 火山性地震のうち、A型地震はP波やS波の相が明瞭で比較的周期の短い地震で、一般的に起こる地震と同様、応力集中による地殻の破壊によって発生していると考えられますが、火山活動に直接関係する発生原因として、マグマの貫入に伴う火道周辺の岩石破壊などの例があります。
- 4) 火山性地震のうち、B型地震は相が不明瞭で、比較的周期が長い地震で、火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

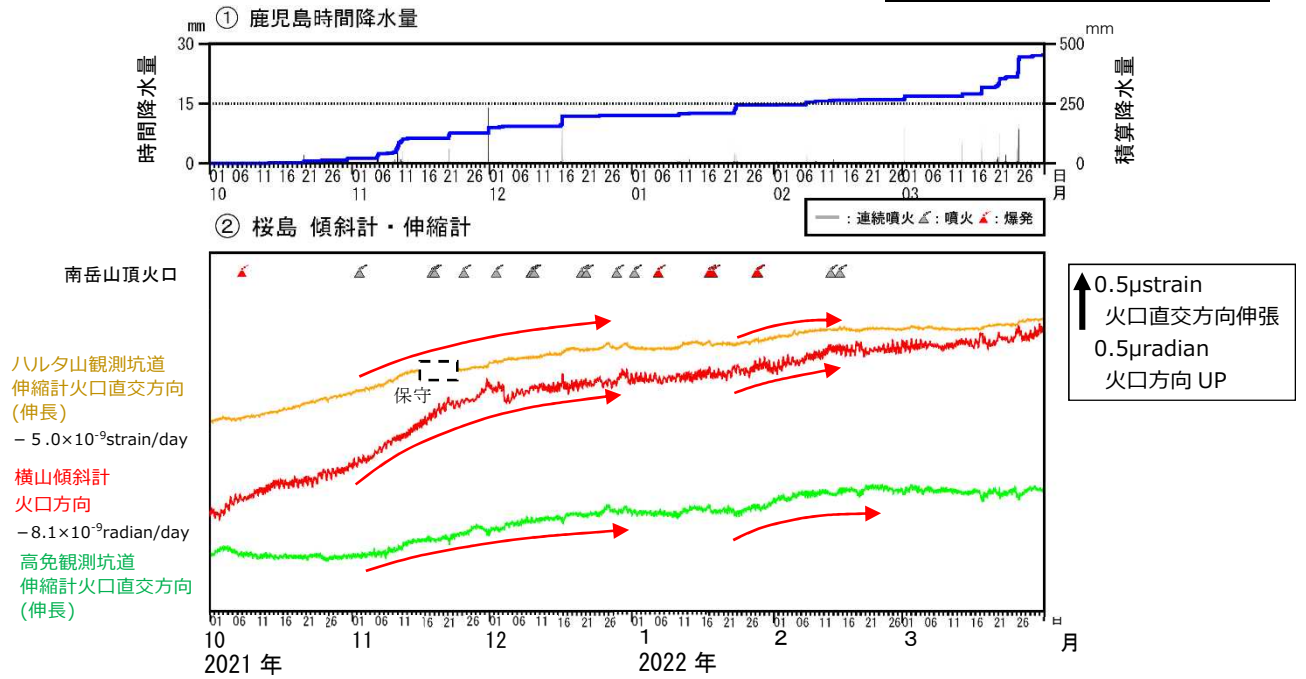


図 8-1 桜島 傾斜計及び伸縮計による地殻変動の状況（2021年10月～2022年3月）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、2021年11月以降、山体膨張を示す緩やかな地殻変動がみられていましたが（赤矢印）、2月下旬頃から停滞しています。

※横山傾斜計火口方向の変動には -8.1×10^{-9} rad/day、ハルタ山観測坑道伸縮計火口直交方向成分の変動には -5.0×10^{-9} strain/dayのトレンドの補正を行っています。

※図の作成には、京都大学のハルタ山観測坑道及び高免観測坑道の観測データを使用しています。

※横山傾斜計における2022年1月19日に発生した日向灘の地震によるステップは補正を行っています。

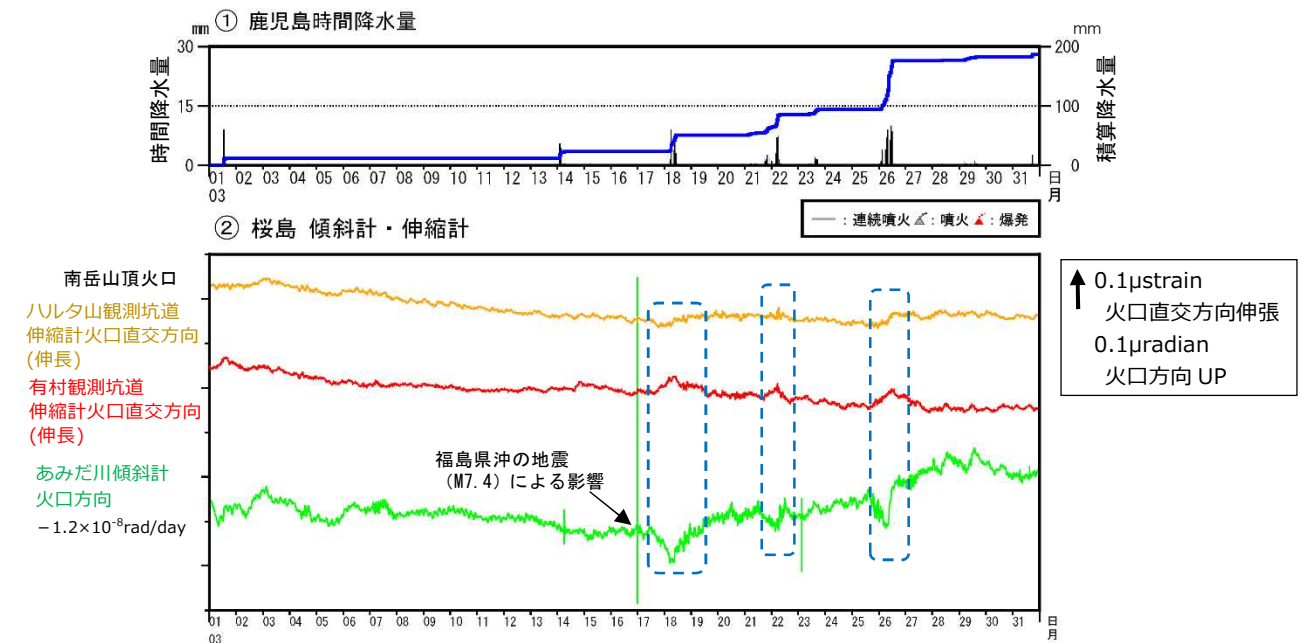


図 8-2 桜島 傾斜計及び伸縮計による地殻変動の状況（2022年3月）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、火山活動に伴う特段の変化は認められませんでした。

※青破線内の変化は、主に降水の影響によると考えられます。

※あみだ川傾斜計火口方向の傾斜変動には、 -1.2×10^{-8} rad/dayのトレンドの補正を行っています。

※図の作成には、大隅河川国道事務所の有村観測坑道及び京都大学のハルタ山観測坑道の観測データを使用しています。

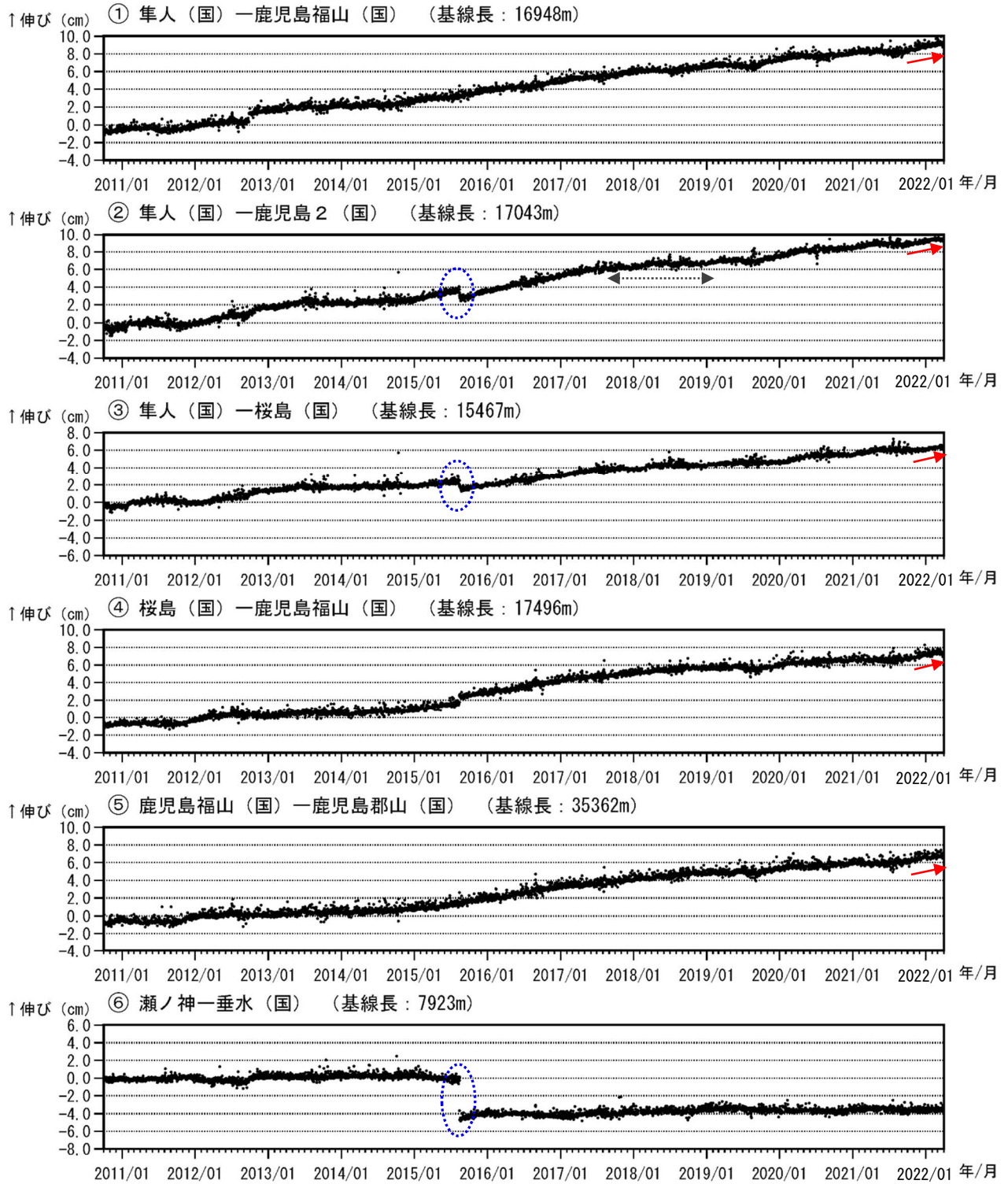


図9-1 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月～2022年3月）

始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、2021年10月頃から、始良カルデラの地下深部の膨張を示す基線の伸びが認められています（赤矢印）。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

これらの基線は図10の①～⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2012年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

基線①～⑤については、国土地理院の解析結果（F3解及びR3解）を使用しました。

基線②は霧島山の深い場所での膨張によるとみられる変動の影響を受けている可能性があります（黒破線矢印期間内）。

青色の破線円内は2015年8月の急激な山体膨張による変動です。

（国）：国土地理院

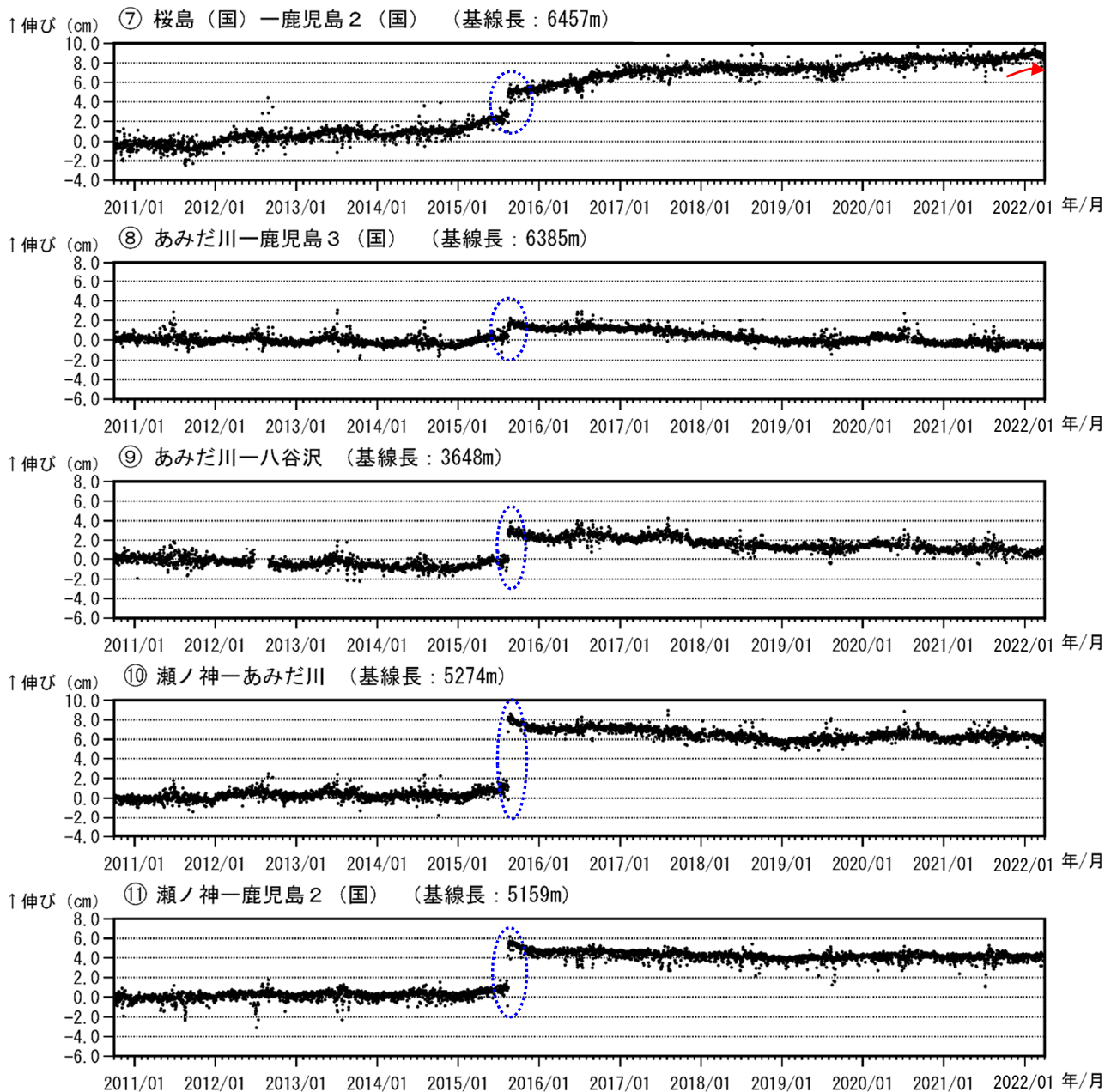


図 9-2 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010 年 10 月～2022 年 3 月）

GNSS 連続観測では、桜島島内の一部の基線で 2021 年 11 月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸びがみられていましたが、2 月下旬頃から停滞しています（赤矢印）。

これらの基線は図 10 の⑦～⑪に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2012 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

青破線内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

（国）：国土地理院

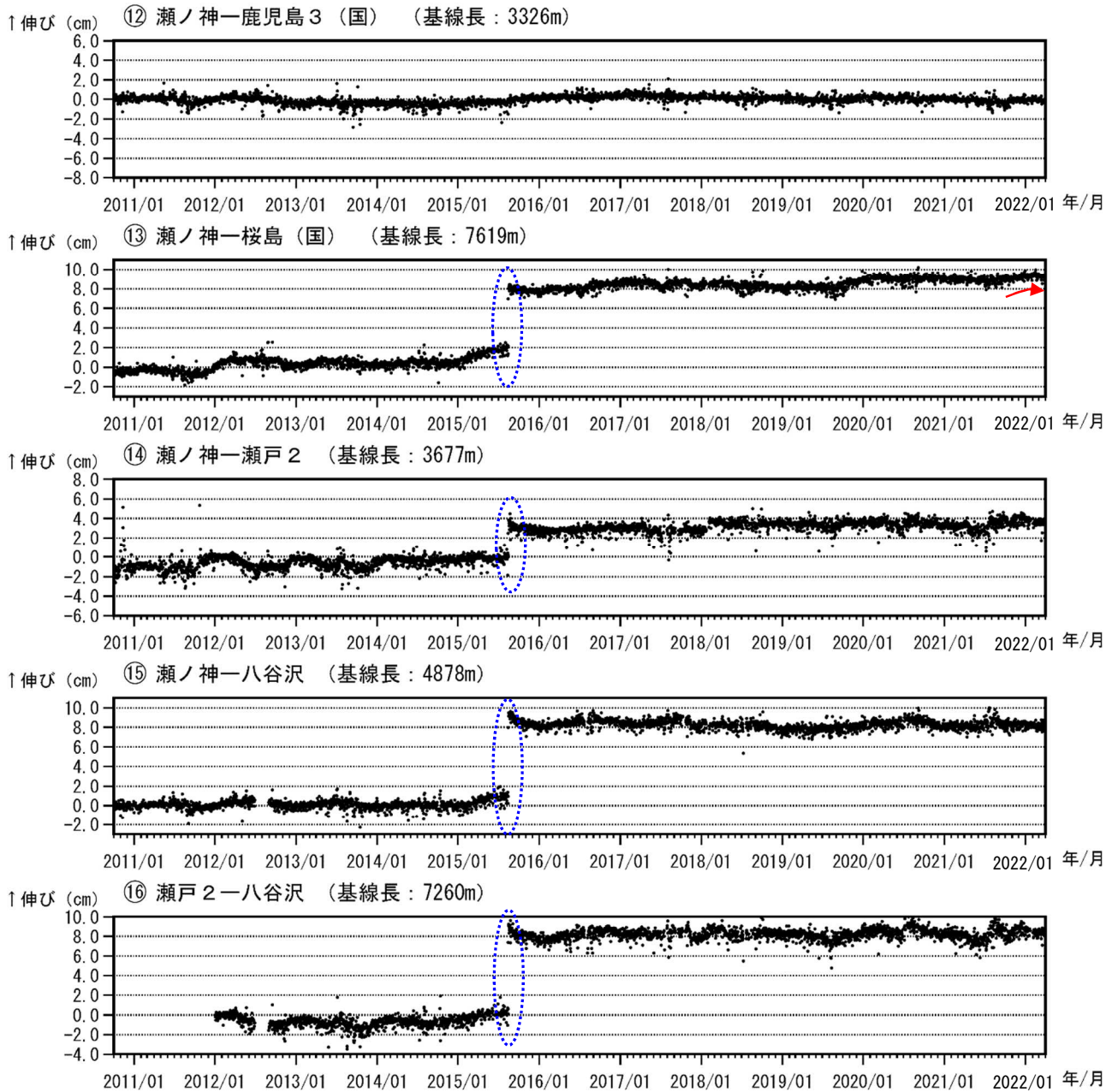


図 9-3 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010 年 10 月～2022 年 3 月）

GNSS 連続観測では、桜島島内の一部の基線で 2021 年 11 月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸びがみられていましたが、2 月下旬頃から停滞しています（赤矢印）。

これらの基線は図 10 の⑫～⑯に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2012 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

青破線円内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

(国)：国土地理院

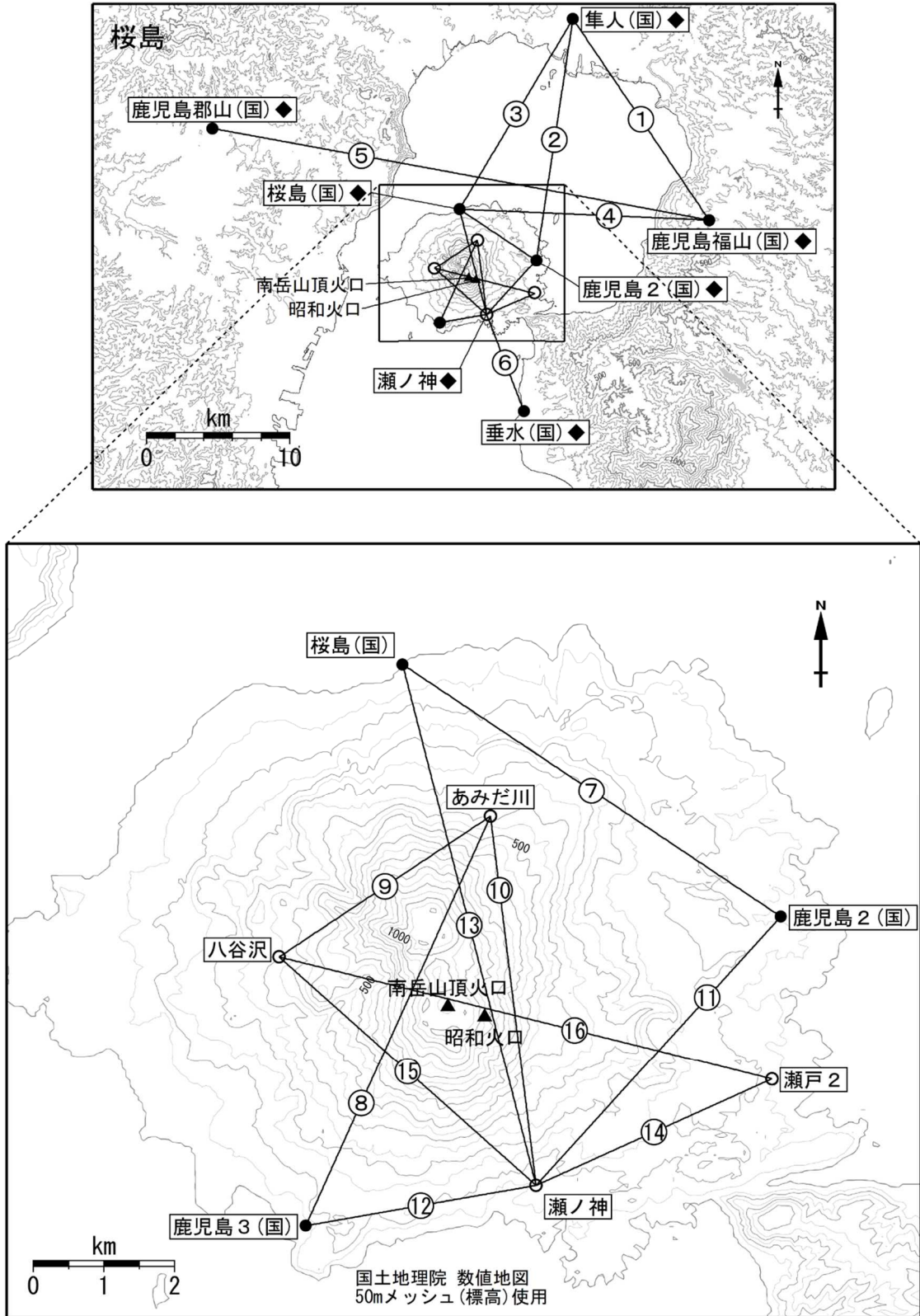


図10 桜島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 （国）：国土地理院

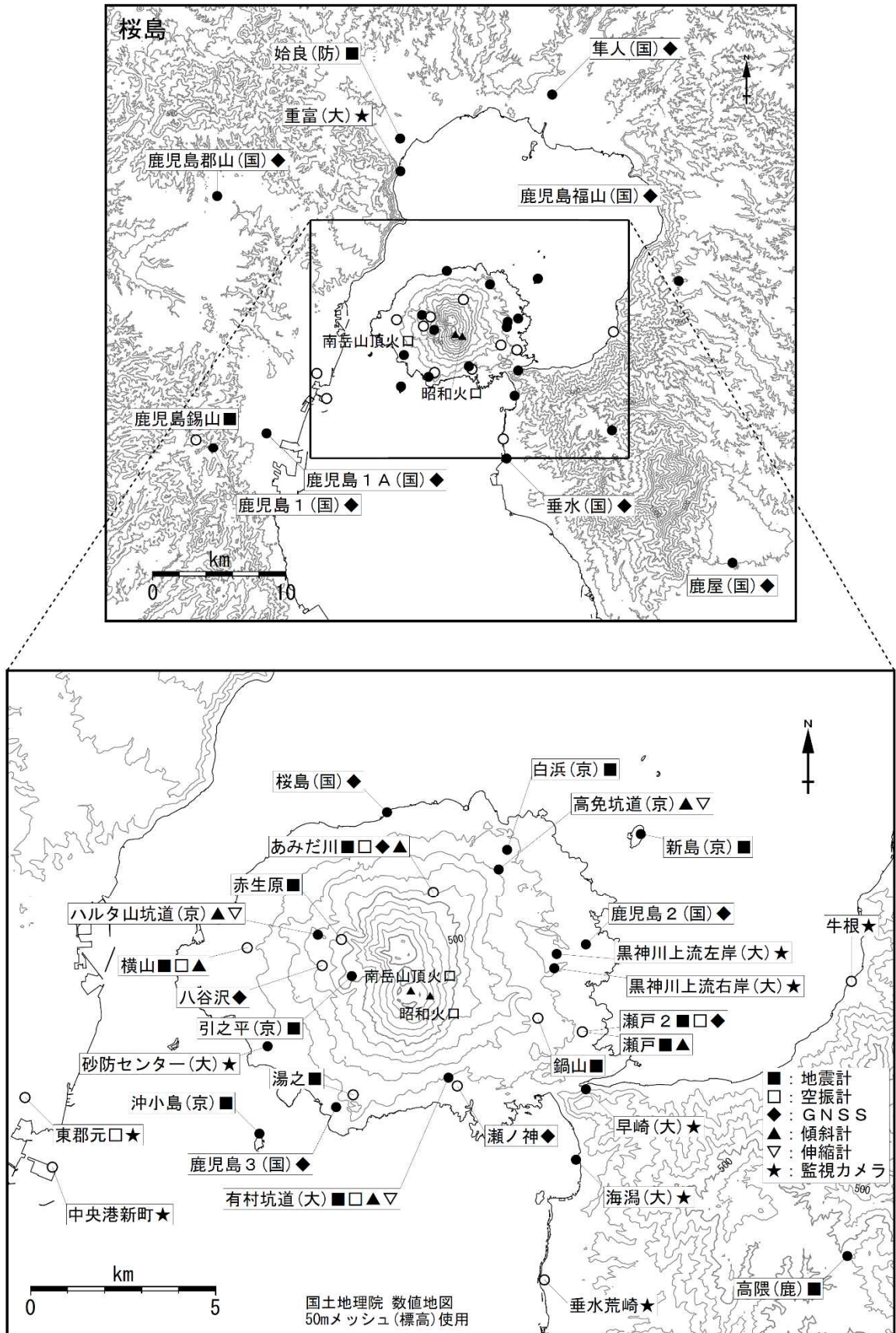


図 11 桜島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 （国）：国土地理院、（大）：大隅河川国道事務所、（京）：京都大学
 （鹿）：鹿児島大学、（防）：防災科学技術研究所